



新型コロナウイルスの一刻も早い終息を祈ります

ペストから学ぶ

カミュの「ペスト」、私の妻は中学3年の時に読んだという。60年近く前である。1952年邦訳が出版、ベストセラーになっていた。（新潮社文庫本になったのは1969年）。私が彼女に始めて会った年である。

現在の進行形の中で熟読して、それはさながら現在のニューヨークを連想させる内容である。新潮文庫版の初版は1969年、今年の3月20日で第86刷、私もかなり待たされての入荷であった。多くの読者が「連帯」して「共感」しているようである。

1, ペストの歴史

「この世には戦争と同じくらいのたくさんのペストがあった」

旧約聖書の出エジプト記第9章にもでてくるが、カミュによると歴史に残るペストは約30回あるという。数例を記載する。

①紀元前429年アテナイとスパルタとのペロポネソス戦争、アテナイを感染症の流行が襲い、多数の犠牲者を出した。鳥一羽住まなくなったと言われるアテネでの火葬台争奪事件

②紀元前3世紀、マケドニアのアレクサンドロス大王が、フェニキア人が建設し地中海での商業活動での覇権を競っていたティルスへ攻め入ったとき、長期にわたって抵抗され陥落しそうもなかった。たまたまペストで死んだマケドニア兵の着衣を敵の飲水用泉に投げ入れたところ、数日のうちに敵兵数千名が倒れ勝利したと伝えられ、生物兵器としてペストが使用された。

③、541年から543年にかけて「ユスティニアヌスのペスト」東ローマ帝国コンスタ



1348年にフィレンツェで黒死病が流行したときの様子。ボッカチオ『デカメロン』の挿絵。Image:

ンチノーブル（今のイスタンブール）で流行し、東ローマ帝国の全人口の40%が死亡「コンスタンチノーブル市内では毎日1万人が死んだ」ともいわれる。ローマ帝国の滅亡の原因ともなった

④14世紀のパンデミック「黒死病」

1347年シチリア島から始まった世界規模のパンデミック、わずか数年でヨーロッパ全体に広がり、人口の30%~60%、8000万人から1億人が死亡したと伝わっている。1348年フィレンツェでの様子はボッカチオの挿絵で描かれている。

⑤1665年9月から翌年10月までイギリス中部のイーム村では数百万人が死亡した。

⑥1871年広東では災禍が住民に鋒先を向ける前に40,000匹の鼠が死んだ。距離に換算すると12kmとなる恐ろしい光景、カミュの「ペスト」もこの鼠の死から始まる。ペストは「世界の不条理」と「人間の不条理」とその相克を描いている幅広い解釈ができるすぐれた芸術作品である。カミュの実存主義をここで論じる暇がない。

防疫から始まった貿易・パスポートと検疫

1374年にはヴェネチアではペストが流行している地域からの船舶の入港を30日間留め、その間に感染者が出なければ入港できた。1377年現在のドゥブロヴェニクでも30日（後に40日）

1383年にはマルセイユで入港停止は40日となった。

「40」をイタリア語ではクアランタ (quaranta) と言い、「検疫」はクアランテーナ (quarantena)。英語では空港で見かけるおなじみ「Quarantine」と言う。ペストの時期に各都市が行った隔離政策に由来した言葉である。

パスポートの始まりは、この時期に陸路の交易で移動する商品と商人を検査する「衛生通行証」から発展した。

2、最初に起きたこと、それはマスク2枚の「救済」であった。

「かくして、ペストがわが市民に最初にもたらしたものは、追放状態だった」（p102・新潮文庫・宮崎嶺雄訳86刷より引用・以後同書）

病人や死者という直接の被害者だけでなく、残された多くの人々もまたある種の追放と監禁状態に置かれ、そこから逃げ出すことができなくなった。

国民の命と健康を第一に考えるという我が日本政府は国民を監禁はしたが、何をしただろうか？何を積極的にし、何をないがしろにしたのか？

The most widely distributed meme showed the family from “Sazae-san,” a much-loved animated show starring a family of seven (and their cat), depicting the members sharing their household’s two masks between them.



海外でも話題4月1日にライターでイラストレーター
の北村チンさんによってツイッター上に投稿された。

「国民の健康と命を守る」安倍首相の言葉だけが先行した。「出来るだけ早く」「すみやかに」「スピード重視」「あらゆる手段」「しっかり取り組む」繰り返されるこの魔力を含んだ言葉に国民はどう反応したのだろうか。

108兆円**規模**の経済対策に大いなる期待と安心感をもった？国家予算の20%と言うフレーズは国民を欺くために十分であった。自民党幹部の中には「これでもたない会社は潰す」という意見がある。表が綺麗なだけ裏は悪に染まっている。この政府の裏面交流に国民は気づかねばならない。

政府発表には「規模」と言うのが多い。しかし、「規模」には希望は見えない。

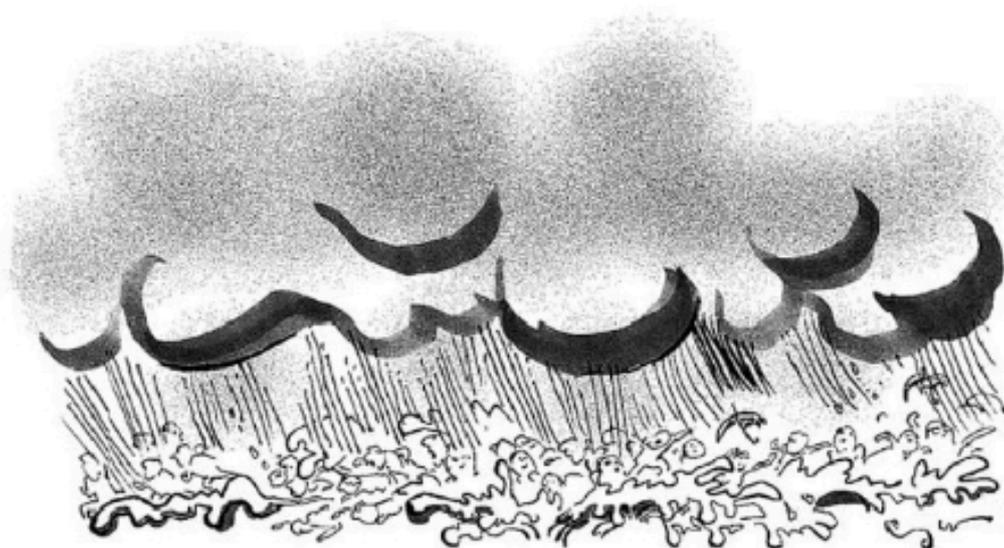
「意向」という言葉も多い。どこへ行こうといているのだろうか。

「確実に死に至る病へ」か、はたまた、「際限なく続く敗北」にか。

ともかく、国民の健康と命第一に配られることになったのはアベノマスク2枚であった。

108兆円規模の詳細については<https://www.asahi.com/articles/ASN4C74KRN4BULZU00S.html>を参照

イラストは朝日新聞2020/04/18朝刊デジタル版から



世界は「ほんくら、無責任、嘘つきのリーダー」が
危機をもたらしていることがよくわかった。
自己防衛しかないということも

山田 紳

3, 災難を喜ぶ人がいる。

「それに、私には気持ちがいいですからね。ペストの中で暮らすことが。だから、それを終わらせようなんてことに手を出す理由は、私には見当たらないんですよ」(コタール) タルー 「ああ、そうでしたね。すっかり忘れてしまって。あなたは逮捕させるわけでしたね。このことがなければ」 (p236)

国民の目が補助と救済に向かっている間に、安倍政権に不利になる問題はすべて蓋がされた。災難が政権の不正を消してしまった。国民はマスク2枚で騙せると考えられた。偉大なる侮辱である。加えてあの大きな顔に、なんと不格好なアベノマスクが4月17日東京都

民に配られ始めた。国民に不格好を押しつけたのである。配った本人は、大きな手柄を立てたように「してやった」とほくそ笑んでいる。手にした人が始めてその不格好さに気づく。466億円は誰が抛出したのであろうか。誰も反対出来なかったとしたら独裁のなにもないのでない。

日本国民が政府から救済されたことを諸外国と比較すると雲泥の差があることを国民は知っている。その国民の多数が安倍首相を支持している。他に適当な人物がいないからという理由で。見極めることができなくなるように誘導されていた。

「美しい行為に過大の重要さを認めることは、結局、間接の力強い賛辞を悪にささげることになると、信じたのである。なぜなら、そうなると、美しい行為がそれほど価値をもつのは、それが希であり、そして悪意と冷淡(無関心)こそ人間の行為においてははるかに頻繁な原動力であるためにほかならぬと推定することも許される。かかることは筆者の与しない思想である。(中略)最も救いのない悪徳とは、自らすべてを知っていると信じ、そこで自ら人を殺す権利を認めるような無知の、悪徳にほかならぬのである」(p193)

「どうもしっくりいってないところがある、うまい汁を吸うのはいつも同じ連中だし、そんなことを続けていけばいつかは運が尽きってことにもなるし、多分――ひと騒動あるだろう」(p360 仙人のような老人)

人間はどこまで嘘をつけるのだろうか

「この年になると、いやでも本気のことをいっちゃいますよ。うそをつくなんて、とても面倒くさくて」タルー(p301)

安倍さんを取り巻く人たちに、そんなときが来るのだろうか

4、悪の根源は無知と無関心である

(上記中略の部分)世間に存在する悪は、ほとんど常に無知に由来するものであり、善き意志も、豊かな知識がなければ、悪意と同じくらい多くの被害を与えることがありうる」(p193)

今更、何を言っても変わらないという諦念が日本の精神的雰囲気となっている。それは最低の豊かさが保たれているからだろうか？あるいは安倍首相の巧みな言葉を見極める力を持たない無知のせいなのだろうか。村度の蔓延というウイルスと国民は戦わねばならない。

「可能な限りの洞察力がなければ、真の善良さも美しい愛もない」

「悪意と無関心のほうがはるかに頻繁に人間を行為に追いやる原動力になる」

安倍さん以外には適任がいないと全託し、それに呼応する国民の無関心は、人間の心の中にペストを作り出す危険性がある。カミュは見極めることの重要性をこの本の中で強調している。頑固で盲目的態度が何を生み出すか、我々は今ここで学んでいる。いや体験しているのだ。忘れられない生涯の記憶として。

5、僕たちはみんなペストのなかにいる

「誰でもめいめい自分の内にペストをもっている」 (p377)

「なぜかといえば誰一人、まったくこの世に誰一人、その病毒を免れているものはいないからだ。そうして、ひっきりなしに自分で警戒していなければ、ちょっとうっかりした瞬間に、他のものの顔に息を吹きかけて、病毒をくっつけちまうようなことになる」

(p376)

カミュは無神論者であると言われているが、「内なるペスト」も洞察している。キリスト教信仰の重要性も認識して、常に信仰と神の問題を視野に入れつつ人間の倫理を考えている。

「この世には罪というものがありますからね」と老婆が言う (p300)

「内なるペスト」には科学がどんなに進歩してもワクチンはできない。人間の「内なるペスト」には免疫力はつかない「罪」がある。(これは筆者の考えである)

罪とは「神に顔を背ける自己中心性」具体的にはモーセの十戒に見られる。

(実存主義にも幅広い解釈がある。この本の中で突然前後の文脈に関係なく現れ、読者に考えさせるようなところが多々ある)

「ペスト」の主人公は医師のリュウだが、彼の陰の存在者としてタルーという人物がいる。(二人の人物は一人のカミュ。これは筆者の見解) この二人が会話する一場面 (p184)

タルー「神を信じていますか、あなたは？」質問はまた自然な調子でなされた。

しかし、今度は、リュウはちょっとためらった。

「信じていません。しかし、それは一体どういうことか。後略」

しばらく会話があって、

タルーが「なぜ、あなた自身は、そんなに献身的にやるんですか。

神を信じていないといわれるのに？

あなたの答えによって、

あるいは私も答えられるようになるかもしれないんですがね」

と続く。意味の深い文章である。

ここは「カミュの実存主義」の顕著な現れであるように筆者には感じられた。

「あるがままの被造世界と戦うことによって、真理への路上にあると信じているのだ」

(p184)

後にパヌルー神父の第二回目の説教がある

「彼はこの日、自分の話を聞いている人々に向かって、恐れることなく、こういうであろう。（訳本どうり。この辺りの表現の仕方、人称の使い方、パヌルーにそう言わしめている私が居る）

『皆さん。その時が来ました。すべてを信じるか、さもなければ、すべてを否定するかであります。そして、私どものなかで、いったい誰が、すべてを否定することを、あえてなしうるでしょう？』(p331)

ペストとう天災のただ中だからこそ、実存主義が神を語らなければならないカミューの誠実さを筆者は感じる。

6, 精神を蝕む新型コロナウイルス

(1)自己嫌悪と猜疑心

軽症者が80%、特に若い人には、たいした敵ではないように言われ、その第一印象は消えないが、日本でも事態が深刻になってきた。数の問題以上に医療崩壊という具体的な恐怖が誰にも分かるようになってきた。ウイルスという病原菌による肉体的苦痛の烈さが知られるようになって、症状への恐怖が防護への伸展になり、緊急事態宣言となった。

しかし、このウイルスは精神をも蝕んでいる。確実に。

それは「人と人を引き離すこと」である。Stay Home & Social Distancing.。

自宅にとどまること。2mの距離を保つことの厳しい且つ世界的な要請である。

そして「自分がかかっているかも知れないという不安」 その中には「自分が人に移すかもしれない」将来への申し訳なさを含む不安と

「あの人はかかっているのかも知れない」という隣人への猜疑心、電車に乗ると「車内には無症状の感染者が居ると仮定して、感染予防の為の行動をとる」無意識の防衛反応がある。このウイルスには人間関係から親密性を取り去ろうとする菌が入っている。

確かに科学的な理解力を持つ人成人には、現状の対策としては理解できる。

問題は幼児である。6歳の子供でも「なんで、離れなくてはならないの」と度々聞いてくる場面が報道され、心が痛い。

(2)ストローク（心の食べ物）を奪う

幼稚園と小学校が休校になって、4歳と7歳の二人の兄弟が留守番をすることになった。5時半に母親が勤め先から帰ってくる。

我慢が限界に達していた4歳の子は「ママ。とって抱きついてくる」

その時、母は厳しい声で「ちょっと待って」と接近を制止する。

理由は「まず、手洗い、うがい、洋服の着替えするから」

パパが帰ってくる。7歳の子が、先ほどと同じように父親に近づくと「ちょっと待って。」とママがいう。こんな状態が連日続いたとしたらどうなるだろう。

肌のふれ合いが最も必要な時期に「心の栄養」が満たされない。交流分析でいうストローク不足である。このウイルスはほぼ間違いなく、この二人の生涯になんらかの影響をもたらす。「人に近づくな」と幼児決断をするかも知れない。今だけの恐怖ではなく将来への不安を植え付ける凄まじい病原菌である。それは罹患者だけでなく、ほとんどの子供になんらかの影響を与える。

この病原菌と戦う乳幼児を抱えた家庭にはメンタルケアが必要である。

筆者が言えることは、手洗い、うがいの儀式が済んだ後には、時間をかけて抱きしめること。だまって抱きしめ、次に抱きしめたまま現実の理由を説明する。

たとい1歳であろうと2歳であろうと説明をしながら抱きしめる。夜の御飯の用意はそれからでも遅くない。パパも疲れているであろうが、同じように抱きしめてあげてほしい。



ウイルスの闘いの最中にこんなことを言う者はまだ少ない。毎日が精一杯だから。

でも、（少子化）少数者たらざるをえない大切な宝を、より健全に育ててほしい。必死なお願いである。ワクチンが出来、「人類が勝ち誇った証として東京オリンピック」が開催されたとしても「幼児の被る心の傷」は将来に向かって存在し、或いは不幸にも成長さえするのである。

2歳の女兒をもつ夫婦が双方陽性となった。女兒は陰性であったので、軽症の母が手元で養育を続ける選択をした家族があった。私は賢明な決断だと思う。

7、第三の範疇について

(1)臨床医師の苦悩

主人公リュウとタルーはしばしば対話をする。物語はペストの進行だけではなく、この対話の中にカミュの哲学があり、それを読み解くには骨がおれるが、職業が医師の人には現実のこの局面（2020/04/）においてリュウの言葉が実感となっていると思う。第三の範疇は唐突に出てくる。

「立派な人間、つまりほとんど誰にもウイルスを感染させない人間とは、できるだけ気をゆるめない人間のことだ。しかも、そのためには、それこそよっぽどの意志と緊張をもって、決して気を緩めないようにしなければならないのだ。

実際、リュウ、

ずいぶん疲れることだよ、ペスト患者であるということは。しかし、ペスト患者たるまいとすることは、まだもっと疲れることだ。つまりそのためなんだ、誰も彼もが疲れているのは。なにしろ、今日では誰も彼もが多少ペスト患者になっているのだから。しかしまたそのために、ペスト患者でなくなろうと欲する若干の人々は、死以外にはもう何ものも解放してくれないような極度の疲労を味わうのだ」

今、世界の医師がすべて直面している緊張状態に似ている。（会話の裏には戦争、とくにナチスが隠れているようであるが、いまそれは捨象する）

4月17日のTV報道で、この局面にある若い27歳の青年医師に

「何故お医者さんになったのですか？」と記者が質問した。

青年医師は答えに窮した。

この、食事をする間もなく、次々とやって来る患者の診察や手術に、いつ呼び出されるか分からない状態、ほとんど仮眠しかしていない、疲労困憊の中で、

「答えられない、わからない」と二度も言った。

高邁な理想が現実の酷惨に直面して理性が混乱したのであろう。

見ている者にも涙がでる瞬間であった。



医師シュナーベル・フォン・ロー
ドイツ語で「ローマの嘴の医者」を描いたパウル・フル
ストの版画（1656年）

(2)第三の範疇・心の平和と共感

こんな会話の続きに、唐突に（これはこの小説によくあることだが）

「もちろん、第三の範疇——つまり、本当の医師という範疇が、当然あっていいんだろうが、しかし、事実として、そういうものにはそう多く出くわさないし、まず困難なことというものだろう。まあ、そういうわけで、僕は（タルー）災害を限定するように、あらゆる場合に犠牲者の側に立つことに決めたのだ。彼等のなかにいれば、僕はともかく捜し求めることはできるわけだ。——どうすれば第三の範疇に、つまり心の平和に到達できるかということをね」

リュウが質問をする「心の平和に到達するためにとるべき道について、タルーには何かはっきりした考えがあるか」と尋ねた

タルー「あるね。共感ということだ」

共感とはなにか？フランス語でSympathie（サンパティイ）

symと一緒に、pathieは英語でpathosでギリシャ語のパトスが語源と言われており、その意味は「哀しみを感じる」から、共感とは「共に哀しみを感じる」ことになる（NHKテキスト100分で名著・アルベール・カミュ・ペストp83）

(3)寄り添うこと

「人間は人間の仲間なしではいられないのであり」（p281）

本音を吐露して連帯を求める。（不条理に）

「われ反抗す、ゆえにわれら在り」この文の始まりは、単数「われ」後半は「われら」複数となっている。

医師リュウは多くの人、悩める、病める人の側に「寄り添い」目の前の事実を見極め、判断してゆく。最後にペストに罹患したタルーを自分の部屋にひきとり老母と看病する。タルーは母を見る

そして、かき消されたような声で「ありがとう。今こそすべてはよいのだ」と言って去る。リュウの共感と寄り添う行動がこの小説の底流にある。日本の作家遠藤周作の著作を思うのは私だけであろうか。

(8)考えさせることを止めさせない

この小説の最後は、悲惨と欠乏をいだきつつペストの終幕にたどり着く。

リュウは自身の半身であるタルーを失うのみならず、最愛の妻の死を知らされる。妻との再会は、おそらく彼の極限を支えたに違いない。

「希望なくして心の平和はない」（p432）

「丘の頂きにある堡塁の大砲は、静止したような空に、ひっきりなしに轟いた。市じゅうの者が外へ飛びだして、苦悩の時期は終わりと告げ、しかも忘却の時期はまだ始まらぬ、この息づまる瞬間を祝おうとした。広場という広場では――」（p438）

「また、それ以外にも、もっと少数の、おそらくタルーのような人々は、自分でもはっきり定義できない、しかし、それこそ唯一の望ましい善と思われる、あるものとの合体を願っていた。そして、他に名づける言葉がないままに、彼らはそれを時には平和と呼んでいたのである」

これ以上の引用は私にはできない。一行一行が胸に迫る。

最後の8行を引用して終わる（p458）

「事実、市中から立ち上がる喜悦の叫びに耳を傾けながら、彼（リュウ）はこの喜悦が常に脅かされていることを思い出していた。なぜなら、彼はこの歓喜する群衆の知らないでいることを知っており、そして書物の中に読まれうることを知っていたからである。――ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもないものであり、数十年の間、家具や下着類の中に眠りつつ生存することができ、部屋や穴倉やトランクやハンカチや反古の中に、しんぼう強く待ち続けていて、そしておそらくはいつか、人間に不幸と教訓をもたらすため

に、ベストが再びその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差し向ける日が来るであろうということ。」

おわりに

2020/04/20現在、10万円の救済金がいつ、国民に届くかは明確ではない。

麻生さんは、手を挙げた人には5月中にはいくだろうという、手を挙げるとはどうすることなのか彼の中には遠藤周作さんの弱者に寄り添う姿勢は見られない。手を挙げているヒトラーを見つめているのだろうか。麻生さん、あなたは遠藤周作に近い人でしょう。

参考資料

スペイン風邪、

1918-1920年に世界各国で極めて多くの死者を出したインフルエンザによるパンデミックの俗称である。スペインかぜは、記録にある限り人類が遭遇した最初のインフルエンザの大流行「1918パンデミック」である(

(第一次世界大戦時に中立国であったため情報統制がされていなかったスペインでの流行が大きく報じられたことに由来する。スペインが発生源という訳ではない。ドイツの敗戦は兵士のスペイン風邪罹患であるとされる)

第1波は1918年3月にアメリカのデトロイトやサウスカロライナ州付近などで最初の流行があり、アメリカ軍のヨーロッパ進軍と共に大西洋を渡り、5月から6月にヨーロッパで流行した。

第2波は1918年秋にほぼ世界中で同時に起こり、病原性がさらに強まり重篤な合併症を起こし死者が急増した。

第3波は1919年春から秋にかけて、第2波と同じく世界で流行した。さらに、最初に医師・看護師の感染者が多く医療体制が崩壊してしまったため、感染被害が拡大した。

この経緯を教訓とし、2009年新型インフルエンザの世界的流行の際にはインフルエンザワクチンを医療従事者に優先接種することとなった。

1918年1月から1920年12月までに世界中で5億人が感染したとされ、これは当時の世界人口の4分の1程度に相当する。死者数は1,700万人¹から5000万人との推計が多く、1億人に達した可能性も指摘されるなど人類史上最悪の感染症の1つである。

アメリカ合衆国ではパンデミックの最初の年に平均寿命が約12歳低下した

近年の研究により、スペインかぜはH1N1亜型インフルエンザウイルスによるものと判明している。(H1N1によるパンデミックは、スペインかぜと2009年の新型インフルエンザ¹の2回である)



マスクをつける日本の女性たち。

日本では、1918年10月に大流行が始まり、世界各地で「スペイン・インフルエンザ」が流行していることや、国内でも多くの患者が発生していることが報じられた。

第1回の流行が1918年10月から1919年3月、

第2回が1919年12月から1920年3月、

第3回が1920年12月から3月にかけてである。

当時の人口5500万人に対し約2380万人が感染したとされる。

(ウキペディアから編集して引用)

